

# 指導資料



鹿児島県総合教育センター

## 国語 第103号

- 中学校，盲・聾・養護学校対象 -

平成17年5月発行

### 基礎・基本の定着を図る中学校国語科学習指導の充実

- 平成16年度「基礎・基本」定着度調査の結果を踏まえた指導法の工夫 -

鹿児島県教育委員会では平成15年度に引き続き、平成16年度「基礎・基本」定着度調査を実施した。この調査は、学習指導要領が示す基礎的・基本的な内容のうち、「読み・書き・算」等の基礎学力について県全体の実態を把握するとともに、各校の課題を明確にし、きめ細かな指導法の改善に資するなど、基礎・基本の定着を目的としたものである。

平成16年度の調査は、小学校第4学年、第6学年、及び中学校第3学年の全児童生徒の約10%を抽出し、国語、算数・数学、英語の各教科と意識調査という調査内容で実施した。

それに対して平成17年度の調査では、小学校第5学年において国語、社会、算数、理科及び意識調査を、中学校第1学年及び第2学年において国語、社会、数学、理科、英語及び意識調査を、各学年すべての児童生徒を対象に実施した。こうした調査内容と調査対象の拡充により、基礎・基本の定着状況をこれまで以上に明確にとらえることができるとともに、より一層のきめ細かな指導を実現することが可能となった。また、悉皆調査にしたことで、より正確に定着の実態を把握できるようになり、取組の妥当性を検討することができるとともに、指導法の具体的な改善が可

能となった。

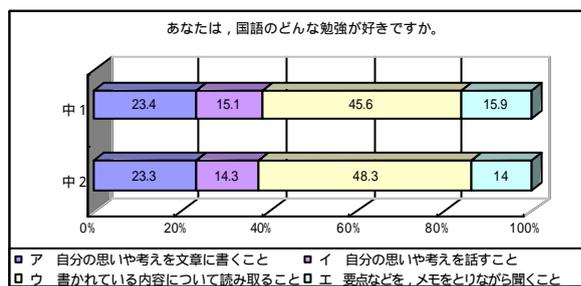
そこで、本稿では今回の国語科の定着度調査結果について分析するとともに、基礎・基本の定着を目指す国語科学習指導法の工夫について述べる。

#### 1 意識調査の結果概要

今回の意識調査は調査実施学年の中から各校1学級を抽出し、質問紙法により実施した。

ここでは、それらの調査結果の中から、特に国語科として顕著な傾向がみられたものについて述べる。

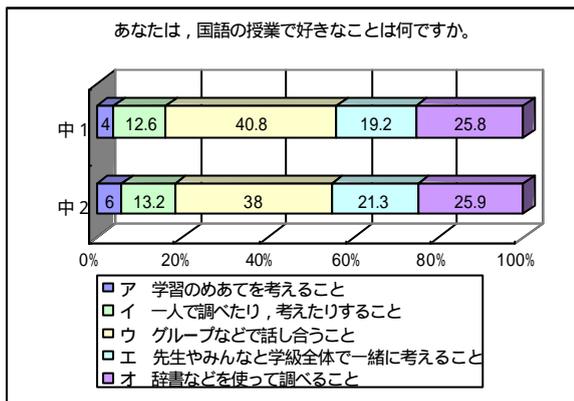
国語のどんな勉強が好きですか。



この問いに対して、中学校第1学年及び2学年ともに「書かれている内容について読み取る勉強」が好きと答える割合が最も高く、「自分の思いや考えを文章に書くこと」が2番目となっている。それに対して、

「自分の思いや考えを話すこと」や「要点などをメモにとりながら聞くこと」などは、両学年においても低く、国語科の学習の中では、敬遠されがちな内容であることがうかがわれる。

国語の授業で好きなことは何ですか。



この問いに対しては、「グループで話し合うこと」の割合が最も高い。しかしながら、実際はいざ話し合いの場となると、友達とかかわりをもって話し合うことを苦手とする生徒が多く見られる。

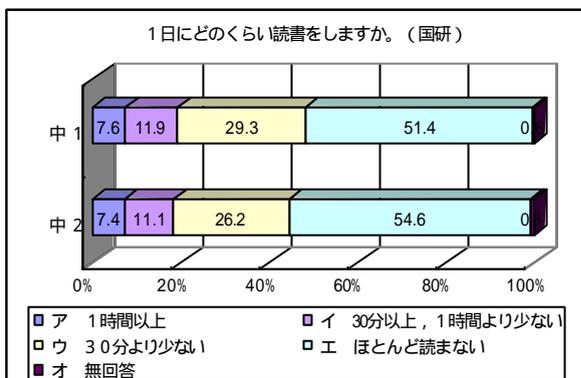
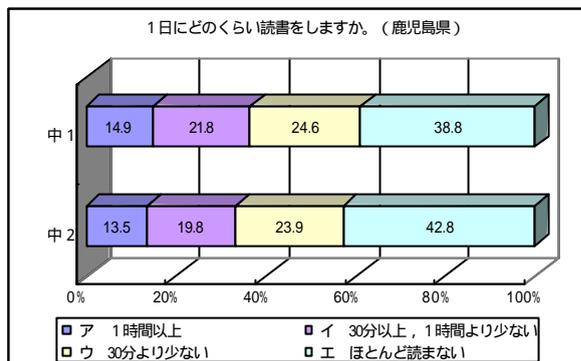
以上のことから、自分の思いや考えを相手に伝えるという活動やメモをとりながら相手の話を聞くといった活動などについては、生徒の苦手意識を払拭する具体的な指導の工夫が必要であると思われる。

また、問題解決的な学習を主体とした授業の構築が求められるようになって久しいが、「学習のめあてを考慮すること」が好きとする割合が、両学年とも低い。今後、魅力を感じる学習課題の設定の在り方や学習の見通しのもたせ方など、国語の授業自体に魅力を感じ、よく分かったと実感することができる授業の実現が求められている。

あなたは、学校の授業以外で、月曜日から金曜日まで平均すると、1日にどのくらい読書

しますか。

国立教育政策研究所（以下、「国研」と記す）が実施した「平成13年度教育課程実施状況調査」の結果と比較すると、全国平均よりも読書に対する意識は上回っているものの、本県の約6,7割の生徒の読書量が1日30分にも充たっておらず、やはり読書量が不足しているという傾向がとらえられた。

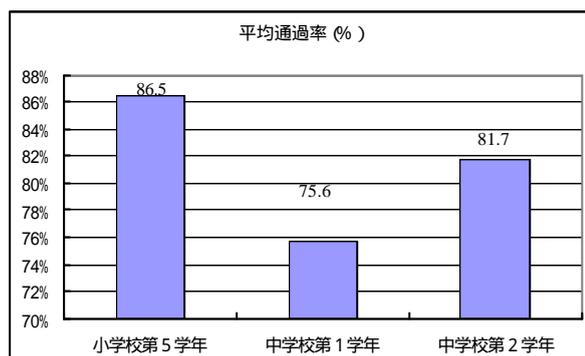


## 2 学力調査の結果と考察

### (1) 小・中学校の系統性の重視

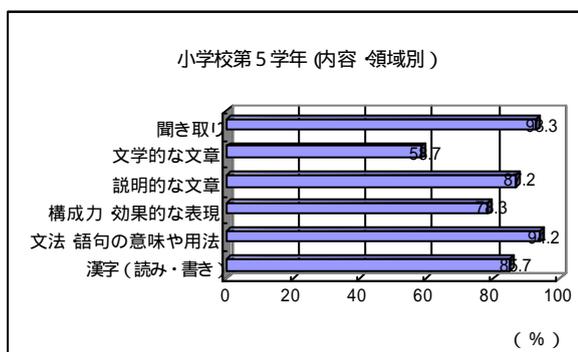
国語科の特性は、その指導内容が系統的・段階的に連続してつながる点にある。したがって、小・中学校の各学年の国語の平均通過率が、他教科よりも高い結果を示したことに注目するのではなく、国語の場合、小・中学校の校種間に大きな開きが生じているということに注目すべ

きである。



国語の基礎・基本の定着を図るためには、これまで以上に小学校と中学校における学習指導の内容や指導法の在り方などについて見直し、小・中学校間の連携をより一層進め、中学校入学時、つまり、中学校第1学年の基礎学力の低下に歯止めをかけることが急務である。

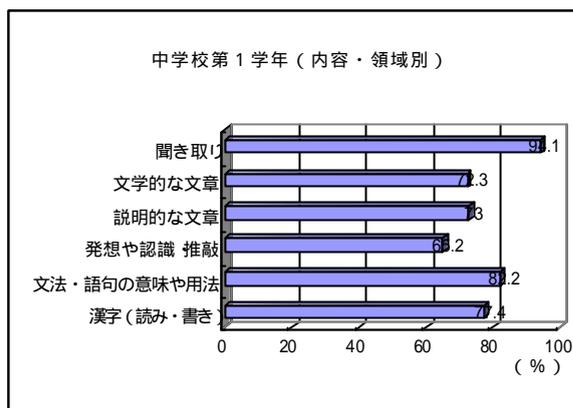
## (2) 内容・領域及び観点別における課題



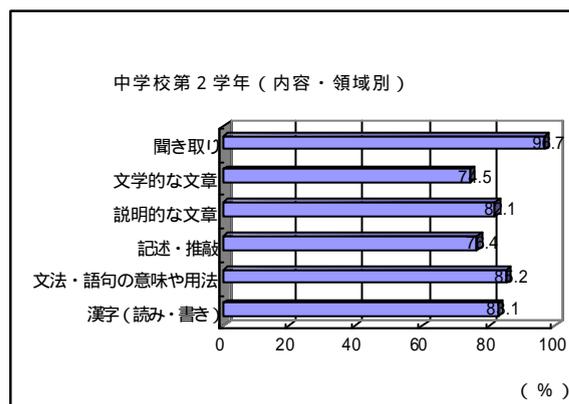
小学校第5学年の内容・領域別の平均通過率をみると、「読むこと」の領域である「文学的な文章」に関する内容が最も低く、次いで「書くこと」の領域である「構成力・効果的な表現」に関する内容に課題があると指摘することができる。

一方、中学校をみると第1学年では「書くこと」の領域の「発想や認識・推敲」に関する内容が低く、次いで「読むこと」の領域における「文学的な文章」や「説明的

な文章」に関する内容に課題がある。

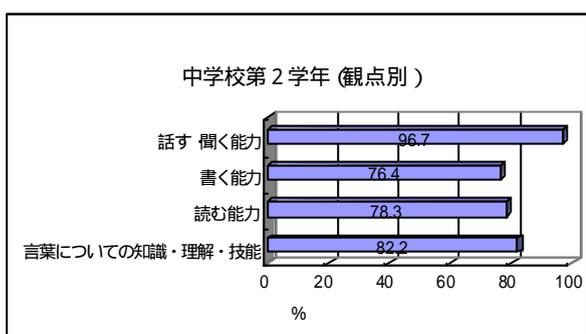
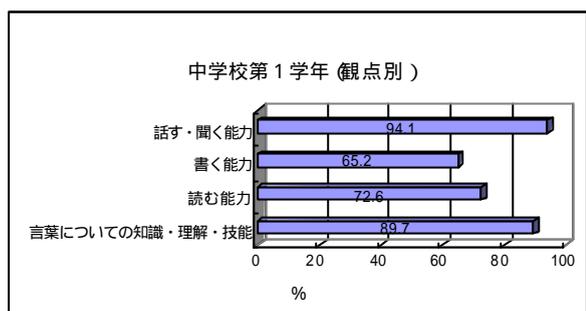
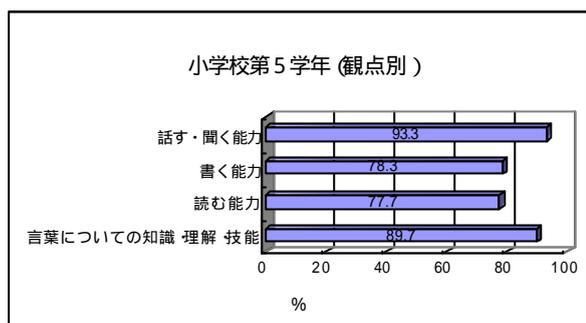


第2学年においても、「読むこと」の領域の「文学的な文章」に関する内容が最も低く、次いで「書くこと」の領域の「記述・推敲」に関する内容が課題となっている。



以上、課題の順位に若干の違いがみられるものの、小学校・中学校共に、「読むこと」の領域と「書くこと」の領域における基礎学力の定着に課題があると指摘することができる。これらの課題は、次の観点別の調査結果にも顕著に現れている。

「書くこと」と「読むこと」の領域について具体的な課題をとらえ、その改善策を検討することが、国語の基礎学力の向上につながると思う。



### 3 「書くこと」の領域における課題

#### (1) 第1学年のつまずき

「書くこと」の領域に関しては、大問

5で出題されている。

- 5三 主述の関係を適切に判断し、分かりやすく書く。(通過率65%)
- 5四 目的(スピーチ用原稿)に応じて書く。(通過率65%)
- 5四 原稿用紙の書き方について気を付けて書く。(通過率60%)

5三の主語の変化に対応した書き分けについては、中1レベルの出題、5四の目的に応じた文の書き分けは小5・6のレベ

ル、の原稿用紙の書き方は、小3・4レベルの出題である。

主語を書き換えさせる場合は、その主語が表す内容をよく考えさせるとともに、主語が変化することによって、主語の示す内容がどう変わるのかについて、論理的かつ集中的に考察する習慣を培ったり、主語を入れ替えて様々な文を書き直す訓練を、意図的・計画的に指導することで、変化に即応できる力を養ったりする必要がある。

目的に応じた文の書き分けについては、多様な文種に対応することができるよう、小学校の教科書構成が変わり、継続的に指導されているが、「書くこと」を億劫がらずに意欲的に書く生徒を育成する意味からも、機会あるごとに様々な目的を設定し、書き分ける活動を積み重ねていくことが大切である。

#### (2) 第2学年のつまずき

第2学年においても、第1学年同様、大問5において「書くこと」の領域が出題されている。しかも、5四の条件作文の通過率が特に低く、「書く能力」が低下している要因を考察することができる。

- 5四 自分の思いを具体的に書く。(通過率60%)
- 5四 根拠を明確にして書く。(通過率60%)
- 5四 原稿用紙の書き方に気を付けて書く。(通過率60%)

自分の思いを具体的に書かせる問題は、中1レベルの出題。自分の意見が相手に効果的に伝わるように根拠を明らかにして書かせる問題は、中2レベルの出題、の原稿用紙の書き方は、小3・4レベルの出題である。

自分の思いを書かせたり，根拠等を書かせたりする場合，身の回りの情報の収集やその選別，自己の思いや願いなどの整理や取捨選択，相手意識や目的意識をしっかりと認識させ，身近な状況等に応じた書かせ方をすることなどが求められる。ただし，課題や目的を提示して生徒任せで書かせるだけでなく，教師による意図的，計画的な配慮の下，自らの考えを自らの言葉で書くという主体的な認識に基づき，書く活動に取り組ませることが肝要である。

自分の思いや考えを書かせたり，その根拠を書かせたりする出題には，全国レベルの調査にも同様の出題例がある。

3]六 この文章を読んで，あなた自身の情報探索能力を高めるために，これからの生活でどのようなことを心がけようと思いますか。心がけようと思うことと，なぜそれを心がけようと思うのか，その理由を書きなさい。

これは，国研が実施した「平成13年度教育課程実施状況調査」中学校第2学年国語Aで出題された問題である。この国研の問題の通過率は54.8%であった。通過率だけを比較すれば本県の方が高いが，国研の問題の場合は全段の文章読解を前提に問うた条件作文になっていることを踏まえると，本県の通過率と安易に比較することはできない。また，国研の問題は文章読解を求める反面，書くことの手掛かりをその文章から見付けることができるので，一概にどちらが書きやすいとは言い切れない。

ただ，国研，本県共に類似した問題を出題したということは，身近な事柄を自分なりに把握するとともに，情報を整理し，自分の思いや考えを自分の言葉で書くという

力を重視していることが明らかである。普段から身近な事柄に着眼し，主体的に書かせる活動を積み重ねていきたいものである。

### (3) つまずきの過程の把握

「書くこと」の領域は他の領域と異なり，書く過程（プロセス）を重視し，それぞれの過程をバランスよく活動させることが大切である。

今回の第1学年の調査問題の場合は，各問題と関連する過程における指導が不足していることが明らかになった。各過程に応じて効果的な手だてを講じることで，課題を解決することができると思う。

設 問	関連する過程
5]三	推敲
5]四	主題設定（目的），取材
5]四	記述，表記に関する事項

同様に第2学年の調査問題の場合も，関連する過程に応じて効果的な手だてを講じることが必要である。

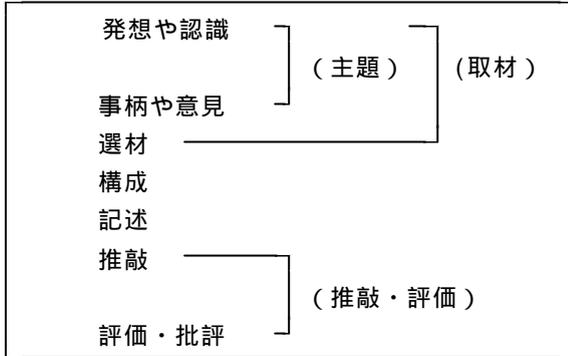
設 問	関連する過程
5]四	発想や認識，選材
5]四	事柄や意見，記述
5]四	記述，表記に関する事項

これまでの「書くこと」の領域における指導は，各過程の指導の軽重にばらつきがあったり，指導過程の一部を省略したりして，十分な指導がなされぬままに書くことだけを要求したり，推敲させたりしている例が多く見られた。そのために，生徒の書くことに対する意欲等が減退してしまい，書くことに対して挫折し，結果として活字離れを誘発してしまうことにもつながったものと思われる。

そこで，中学校学習指導要領解説国語編の「書くこと」の領域を再度確認すること

で、特に書くための材料を集めたり、文章の構成を検討させたりするなど、不十分であった指導過程の改善に日常的に努めることが大切である。

【中学校における「書くこと」の過程】



4 「読むこと」の領域における課題

「読むこと」の領域に関しては、第1学年の大問3-1の通過率が低くなっている。

3-1 文章の構成や展開，段落相互の関係などの内容を正確にとらえ，適切な接続語を選択する。（通過率65%）

3-1は説明的な文章，青木淳一著の「自然の小さな診断役」からの出題である。この出題は，中学校学習指導要領国語編の「読むこと」の領域における「構成や展開」の指導事項と密接に関連している。

【構成や展開】<第1学年>  
ウ 文章の中心の部分と付加的な部分，事実と意見などを読み分けて，文章の構成や展開を正確にとらえ，内容の理解に役立てること。

ここでは，文章の構成や展開を正確にとらえ，内容を確実に理解させることが求められている。つまり，文章読解に関して最も大切な力を問うた問題であると言える。

ただ，今回の場合は内容の理解だけでなく，接続詞の働きを理解し，知識として備えていなければならないため，「言語事

項」(1)【単語】とも関連しており，単純に「読むこと」の領域の落ち込みととらえることはできない。

この問題の誤答傾向は，3とした例が圧倒的であるが，3は「だが」（逆接）と「また」（対比・選択）の組み合わせである。今回の誤答が，接続詞の働きの理解や知識の定着に原因があるのか，文の前後関係の判断や内容のとらえ方にミスがあったのかについては，生徒個々の誤りの要因をしっかりと把握することが肝要である。

もし，言語事項における知識・理解面の定着不足が原因ならば，類似例等の学習を繰り返すことで，直ちにその過ちを是正したい。しかしながら，問題は「読むこと」の領域そのものに要因がある場合である。

ア（接続詞を選択させる設問）については形式段落(3)・(4)と(5)の内容を比較し，ケダ二類に続いてササラダ類を述べていることに気付くことで「並立・累加」の関係をとらえることができる。

一方，イ（アと同様）については，それを挟んでいる「木のある所」と「自然の森や人工林」，それらと対比している「草原」との関連をとらえながら，内容を理解することで，そこに「説明」するための接続詞が必要であると判断することができる。

このように，接続語等の文の成分に関する知識や理解にかかわる指導については，機会あるごとに類似した事例を取り上げ，繰り返し指導していくことが大切である。

5 課題の解決につながる改善策

(1) 「書くこと」の領域に関する改善策  
前述のとおり「書くこと」の領域にお

いては、書く過程を重視することが大切である。そこで、各過程に着眼して、その改善策について述べる。

#### ア 主題設定の過程における工夫

自ら考え、主体的に設定した主題であれば、生徒が意欲的に取り組むのは当然である。そこで、書く目的に対してどのような主題を設定すればよいのか、その手掛かりとなるモデルを示したり、個々の負担を軽減する意味からも、主題設定を取り組みやすくするワークシートを作成したり、対話やグループなどの活動を通して主題を設定させたりするなどの工夫が求められる。

#### イ 構造化の過程における工夫

書く構造が視覚的にとらえられるようにするためには、意味段落や形式段落の構造を図式化させたり、表としてまとめさせたりする必要がある。その際、構造化すべき内容や段落などを、操作して試行錯誤することができるよう、カードや付箋紙などを活用するといった工夫が必要である。

#### ウ 取材・選材の過程における工夫

取材や選材に当たっては、情報収集の手段やそれらの情報の処理について指導したい。情報収集においては、教師が安易に資料を提供してしまうのではなく、生徒自らがインターネットや図書館などの活用により、主体的に調べたり、取捨選択をしたりすることができる指導の工夫を図ることが大切である。

#### エ 記述の過程における工夫

記述に関しては「取立て指導」を工夫したい。例えば、発達段階を考慮した

「短作文」や「条件作文」などの演習を、日ごろから意図的、計画的に設定して取り組ませることが必要である。また、漫画等を活用し、生徒の情意面にも配慮しながら意欲的に書く活動に取り組ませるなど、書くことが億劫にならない工夫を図りたい。

#### オ 推敲の過程における工夫

推敲については、教師が一人で抱え込んでしまい、また、一部の生徒にしか還元されないといった実態があった。これは、コンクールの応募等を主たる目的に推敲が行われていることが要因と思われる。そこで、推敲の過程そのものを生徒主体に取り組ませ、自己評価や相互評価を通して生徒自身の推敲する力の向上につながる活動を工夫して設定したい。

具体的な推敲活動に当たっては、文字を色分けしたり、付箋紙を活用したりして、推敲の観点や意義が見て取れる工夫に取り組みたい。また、推敲が苦痛にならないよう、生徒間で助け合いって推敲できる工夫に取り組むことも有効である。

#### (2) 「読むこと」の領域に関する改善策

今回の「読むこと」の領域における課題は、まさしく「読解力」をいかに高めるかにその命題がある。そこで、読解力の向上につながる改善策を提言したい。

#### ア 問題解決的な学習の実践・定着

読解力の向上のためには、生徒が主体的に悩み、考えることが肝要である。そのためには、自分たちの初発の感想や読みの疑問等を手掛かりに、学習課題を設定することが大切である。

他者から与えられた課題の解決では、

読解力は高まらない。まず、自力で追究を図り、それを手掛かりに生徒が助け合って解決に迫る。次に、再度自力で解決に向けてチャレンジする。こうした追究を繰り返す過程で自己の変容を自覚することで、個々の読解力は高まるのである。

#### イ 読解力の高まりを自覚させる工夫

生徒に読解力の高まりを自覚させるためには、階段を一步ずつ上がるように、自己の読みが変容するといった実感を味わわせることが大切である。

そこで、事前に生徒の読みを予測するとともに、自己追究や相互追究の際の机間指導を通して、生徒の読みの実態を把握し、その結果を基に指名計画を立て、効果的に指名しながら相互に練り上げる活動をさせることで読みの深まりを自覚させることができる。

#### ウ 板書と連動したノート指導の工夫

前述のとおり、生徒が読みを深めるには、自己の読みの変容に気付くことが大切である。しかし、単に生徒が自己の変容に気付くだけでなく、視覚的にその違いをとらえることで、読解力の高まりは一層期待できる。

特に、自己追究と自己解決の状況が明確に板書として示されることは、視覚的に自己の変容をとらえさせる上で効果的である。また、その板書がノートに反映されることで、視覚的な効果は更に大きくなる。ぜひ、板書の工夫とともに、ノートの取り方の指導を充実していきたい。

### (3) 読書動機の活性化

生徒の読書量が減少していることは、国

語の基礎・基本の定着に大きな影響を与えている。日々の授業や家庭学習の中で、読書活動を活性化させる指導の工夫が急務である。

これまで、図書館の整備や朝読書の時間の設定、読み聞かせの工夫など、読書環境の改善が中心に取り組みられてきた。しかしながら、生徒が「読書したい」、「読書せざるにはいられない」と思えるために、内面から読書意欲を高める工夫がなかなか実現されなかった。そこで、生徒の読書意欲を高めるために、次のような指導の工夫を提言したい。

- |   |                 |
|---|-----------------|
| ア | 感動的な本との出会いの場の工夫 |
| イ | 生徒の読書動機を触発する工夫  |
| ウ | 読書感動を実感させる工夫    |
| エ | 読書感想等を発信させる工夫   |

今後、生徒が主体的に読書活動に取り組むことができるよう、各学校が実態に応じて生徒の内面に働き掛ける指導の工夫・改善を図ることが期待される。

今回の定着度調査は、第1学年と2学年において、すべての生徒を対象に実施された。ただ、悉皆調査とはいえ、1回の調査でとらえた問題点であり、この指導資料で取り上げた内容は、教科における課題のすべてを網羅しているわけではない。今後、このような分析等の積み上げを重ねていくことで、本県の国語科における課題が明確になるとと思われる。

各学校においては、今回、指摘した課題とともに、自校におけるその他の課題についても分析・把握し、生徒が自己の変容に気付くことができる具体的な改善に取り組まれることを期待している。（教科教育研修課）